山田 実(三重)
株式会社 アイチ金属
[名古屋本社]〒462-0011 愛知県名古屋市北区五反田町77
Tel:052-909-5600　Fax:052-909-5610
[東京支社・DeCastelli ショールーム]〒141-0022 東京都品川区東五反田5-25-19 東京デザインセンター2F
Tel:03-6456-2212 Fax:03-6456-2213

メタルの可能性を最大限に表現できる企業であり続けたい

品格のある家柄を雄弁に語る門扉。居住空間にスマートさを与える階段。熟考の時間を生む壁。人の足を止めるファサード。緊張感とモチベーションを作るデスク。空間に存在感をもたらすキャビネット。人が暮らし、働き、憩う空間に用いられるメタルは、設計の意図を雄弁に物語ります。

私たちアイチ金属はメタルの表現を最大限に抽出できる企業でありたい。との思いのもと、技術を磨き、知識を蓄積し、新たな発想を探究する企業としてすべてのご要望にお応えするべくメタル製作に取り組んでいます。

例えば、ドイツ生まれの特殊メタルコーティングVeroMetal(ヴェロメタル)。リキッドメタルと呼ばれる分野が充実しつつある近年においても、特に高い品質と多様な仕上がりを実現できるブランドとして業界をリードしております。

また「金属製品が未来を創る」という共通理念のもと、イタリアのメタルファニチャーブランドDe Castelli(デカステッリ)との日本総代理店契約を結びました。“金属が織り成すエイジングの美しさ”そして、“素材感を活かしたモノづくり”唯一無二の家具のコレクションやメタル内装材のサーフェイスをお届けしております。

VeroMetal

De Castelli

昨年には、ワンタッチ

アルミFIXフレーム『ALGRID(アルグリッド)』(実用新案登録商品)を発表。スマートでデザイン性が高く、窓から無骨な印象を取り除くことが出来るこのフレームは、設置も容易で、現場の　工程数を大幅に削減することを可能にしました。12月よりオンラインサイトも開設し、プロの工務店様のみならずDIYとしてもご活用いただけるようになりました。

今後のアイチ金属の新しい挑戦にどうぞご期待ください。

2022 3 MAR No.402

ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

CONTENTS

法人協力会通信 55
株式会社アイチ金属 ―― 表紙裏
山田 実

地域会だより ―― 1

連載：マクロとミクロの視点から組み立てた
最終回 景観計画群のマネージメントの実践
ー日本建築学会賞受賞業績記 第６回ー ―― 2
浅野 聡

静岡発
熱海伊豆山・土石流災害で ―― 4
伝えたいと思った三つのこと
高島 ゆかり

愛知発
「造園」と「建築」の関係を考える。 ―― 6
-「動いている庭」とジル・クレマンについて-
エマニュエル・マレス氏 田瀬 理夫氏
西村 和哉

歴史学の視点 ―― 7
ー電脳設計論壇 #10 前山 和喜 氏
山上 健

名古屋市立大学授業
「建築家の仕事」 ―― 8
鈴木 賢一 澤村 喜久夫 森 哲哉

岐阜発 JIAの窓
岐阜版「ペチャクチャ」ー初めての開催を振り返って ―― 10
長田 芳幸 齋藤 俊輔

自作自演 私の仕事06
ムホナナ／ナムナホ ―― 11
道家 洋

私のとっておき19
AXチェア ―― 11
生津 康広

保存情報 第243回
データ発掘：住吉燈台・船町港跡 ―― 12
鈴木 祥司

編集後記 ―― 12
羽柴 順弘・菅沼 好典

三重発
三重建築学生合同課題発表会2021 ―― 13
森本 雅史 平西 明日香

地域会だより 今後の予定

■JIA静岡地域会
・3/10 静岡地域会役員会の開催（WEB同時開催）

■JIA愛知地域会
・3/11 第63回愛知地域会ゴルフコンペ（JIA・愛知賛助会主催）
・3/未定 CPD研修会（WEB開催）（JIA・愛知賛助会主催）

■JIA岐阜地域会
・3/12 JIAの窓 ぎふ木遊館 見学会

■JIA三重地域会
・3/11 ・第８回役員会
・第７回例会（事業報告・次年度事業計画）、会員発表会
三重県総合文化センター ※ZOOM併用

Bulletin Board

見 学 会

JIA 東海支部 岐阜地域会 2022「JIAの窓」建築見学会

ぎふ木遊館 見学会

岐阜県は全国で2番目に森林の占める割合が高い県。その豊かな森から、色も木目も香りもそれぞれの12種類の樹木を取り入れ木遊館は建設されました。木造平屋建て、主な使用木材は、カラマツ、ヒノキ、スギ、クリ、ナラ、県産材使用率は98%です。

今回は、設計者株式会社デザインBOXさんに案内を頂く見学会となります。見学後には、ぎふの木育への取り組みや岐阜県産材について、その他木にまつわる話を岐阜県林政部の方にご講演頂きます。

コロナに対しては万全の対策にて設営いたします、ぜひ皆様の参加をお待ちしております。

■ 主 催 JIA東海支部 岐阜地域会
■ 日 時 2022年3月12日（土）15：45～17：30（受付15：15より現地にて）
■ 会 場 ぎふ木遊館
住所／岐阜市学園町2-33 TEL／058-215-1515
■ 参加費 無料（先着申込30名）
■ CPD単位：２単位

■ **お申込**（2022年3月5日（土）締切）
氏名・所属（学生は学校名）・建築士番号・住所・連絡先（TEL . FAX . e-mail）を明記のうえ
[e-mail] h-yamada@hiropla.jp 又は [FAX] 058-380-2314 までお申込ください

※新型コロナウイルスの状況により、中止とさせて頂く場合がございます。
※当日はマスクの着用をお願いします。
※発熱（37.5度以上）、頭痛、せき・のどの痛み、味覚・嗅覚の違和感、倦怠感等の症状がある方は参加をご遠慮ください。
※駐車場は「ぎふ木遊館」敷地内駐車場をご利用頂けます。

表紙 モノのカタチが空間に与える影響

フィボナッチ・ツリー（Fibonacci tree）。フィボナッチ数列（Fn+2 = Fn + Fn+1 （n ≥ 0））の数に合わせて枝分かれしていく木。樹木は上に行くほど枝が多いものだが、そこに理論（数式）を当てはめた１つの例。ものをつくっていくときも、なんとなくではなく、なるべくそこにあるはずの理論を読み解きながら選択していきたいと考えています。

栗原 健太郎（JIA愛知）
studio velocity 一級建築士事務所

マクロとミクロの視点から組み立てた景観計画群のマネージメントの実践

― 日本建築学会賞受賞業績記　第６回 ―

最終回

1.はじめに

本稿では、筆者による景観計画群のマネージメントの実践のまとめして、前号までの内容を振り返りながら述べてみたい。

2.伊勢河崎まちづくり展示プロジェクト –調査結果の公開と展示

三重県内では、これまで歴史的景観や自然景観を対象にした景観調査は（一部地域を除いて）殆ど実施されてこなかったが、本連載で紹介させて頂いた通り、筆者から行政担当者や地域住民に働きかけをして6市の27地区において実現し、県内の代表的な歴史的町並みは概ね網羅することができた。合計すると調査対象地区面積:742.6ha、建築物:10,422棟、工作物:2,054件に達し、膨大な基礎データを収集することができた。また伊勢志摩国立公園や熊野古道における自然景観を対象にした眺望景観調査も8市町の69地区において実現し、これらの調査結果をもとに9つの景観計画群の策定と18の重点地区群の指定につなげることができた。

調査結果は報告書にとりまとめ、行政担当者との検討、景観審議会や住民説明会等における協議の場、講演会やシンポジウム、学会発表、専門誌等で公開して解説するように心がけるようにした。ただし、本来、調査結果は資料館や博物館等において継続して展示することができればベターである。町並みの形成史や歴史的建築物の特徴、景観上の見どころ等を解説することができ、地域住民や来訪者に当該地区の個性と価値を知って頂くことにつながるからである。

とはいっても実現できずにいつも苦戦しているが、唯一実現できたのは「伊勢河崎商人館」（伊勢市所有の国登録有形文化財でNPO法人伊勢河崎まちづくり衆が指定管理者）である。商人館の開館前から浅野研究室が協力してきたご縁もあり、歴代の浅野研究室メンバーが作成した町並みの解説パネル群と町並み再現模型、商人館模型を展示させて頂いている。特に町並み再現模型は、全盛期の昭和40年代の景観を再現した一番の労作で、来訪者にも好評を頂いている。（JIAの会員の皆様も伊勢河崎の町並みを見学にいらして頂ければ幸いである。）

3.みえ歴史的町並みネットワーク –ネットワークづくり

景観まちづくりに継続して取り組むに連れて、県内の景観行政団体が増えて歴史的町並みの保全活用に関心が高まってきたこと、東日本大震災で歴史的町並みにも被害が生じたこと、等を背景に、景観・防災まちづくりの推進のための情報共有の場づくりを目的にして、筆者が呼びかけ人となって「みえ歴史的町並みネットワーク」を設立することができた。各地の関係者が、一人で悩まずにネットワークをつくって相談し合う場が欲しかったからである。

会員は、建築職能団体（JIA東海支部三重地域会・三重県建築士事務所協会・三重県建築士会）、景観行政団体等（国土交通省中部地方整備局・三重県・三重県教育委員会・桑名市・亀山市・伊賀市・名張市・鈴鹿市・津市・松阪市・伊勢市・鳥羽市・志摩市）、町並み保全団体、個人会員であり、定期的に公開シンポジウムを開催し、特に東日本大震災の被災地から関係者を呼び、防災まちづくりへの示唆を得るように務めてきた。なお、筆者とともに共同代表として事務局も務めて頂いていた新開悟氏が残念ながら急逝されてしまったために現在は活動を休止しており、体制を整えて再開できればと思っている。

4.歴史的町並みを理解して楽しむポイント

JIAの会員の皆様は、ヘリテージマネージャーとして歴史的建築物の活用に関わっている方も多いと思われるため、歴史的町並み

図1　調査結果の公開と展示：伊勢河崎商人館におけるまちづくり展示プロジェクト

を理解して楽しむためのポイントについて2点のみ補足したい。

第一のポイントは、連載の第3回でも触れたが、現在の日本の国土構造が決定されたのは近世であることである。古代や中世も重要であるが、都市計画の視点からみると、近世に建設された都市群は国土を覆うように計画され、現在まで存続して持続可能性を持つことを証明している。近世の歴史を知っておくと町並みを楽しむ上で役に立つことが多い。

第二に、歴史的町並みは、近世以降の各時代のブレンド景観ということである。一般的に歴史的町並みは江戸期の建築物が主となって構成されていると思われがちであるが、江戸期の建築物群のみで町並みを形成している地区は、三重県内のみならずおそらく全国的にもない。

江戸期の建築物の一部は現存しているものの、明治～大正～昭和期（戦前）に建て替えられているものが多く、江戸期から昭和期までの各時代の建築物が集合したブレンド景観であるのが、日本の町並みの特徴なのである。歴史的建築物といっても時代によって特徴が異なり、（産業革命以前の伝統技術をベースにして）一定の範囲内で緩やかに変化しながら全体として調和しているデザインの集合体といえる。コーヒーに例えるとストレートではなくブレンドを味わう気持ちになって見方を変えて頂ければ、きっと新たな発見も多いはずである。

5.NHKブラタモリの出演

景観まちづくりの中で忘れられない思い出の一つは、NHKのブラタモリに出演してタモリさんを連れて伊勢のまちを案内したことである。タモリさんも口外しているが、ブラタモリの台本はタモリさんと女性アナウンサーには見せられておらず、事前に知っているのは案内人とスタッフだけである。従って、タモリさんとアナウンサーは案内人がどこに連れて行くのかは知らず、ロケの当日にその場で行き先を知らされることになる。

私が案内をしたのは、内宮おはらい町、おかげ横丁、御幸道路、近鉄宇治山田駅（国登録有形文化財）であるが、タモリさんは得意の地形・地質以外に歴史にも造詣が深く、伊勢のまちのヒミツを質問すると的確な返答をされるのに驚いた。タモリさんとアナウンサーは答えを教えてもらっていないために、テレビのリアクションはホンモノである。

裏話を書きすぎて関係者に迷惑をかけるといけないので控え目にさせて頂くが、出演が決まるとそこからの準備はそれなりに大変である。台本をつくるためのアイディア出しから始まるが、担当ディレクターの判断で台本はしばしば書きかえられ（案内人としては、その度に説明を考え直さないといけないことに…）、本番の直前には、東京から撮影スタッフ陣が来て入念にリハーサルを行う（何度も伊勢に行くことに…）といったスケジュールになる。そして数多くのシーンを撮影しても編集でボツになる（自分の頭の中にだけ焼き付いている幻の映像になることに…）ものもある。それにしても、一日案内するだけでこちらは疲れてしまうが、台本を知らされないまま一発勝負のロケをこなして絵になる映像をつくることができるのは、さすがタモリさんである。タモリさんは、自分の名前がついた冠番組はとても大切にしていてロケを楽しみにしているとのことであった。

6.おわりに

一年間にわたる連載も本稿が最終回である。執筆の機会を頂いた JIA 東海支部の水野豊秋支部長、川本直義会報委員長、会報委員会の皆様には、改めて心からお礼を申し上げたい。

東海地方には、近世の重要な史実が集積し、信長・秀吉・家康の三英傑を生み出し、城下町、宿場町、門前町、歴史街道、古戦場といった地域資源が豊富であり、歴史・文化を活かした都市再生が可能である。そしていよいよ昭和期も遠くなり、経済成長期に建設された近現代建築やニュータウン等で計画水準の高いものは未来の新しい地域資源になる可能性を有しており、失われないように今から大切にしておきたい。

まちづくりには終わりがない。私たちの研究室では、新しい景観まちづくりプロジェクトがスタートしている。三重大学の大井隆弘先生とともに鳥羽志摩地域の海女集落の景観調査に取り組んでおり、定期船に乗って離島にも足を運んで奮闘中である。海女集落を継承する道筋をつけることができた暁には、また JIA の会員の皆様にご報告できれば幸いである。

最後に、読者の皆様、景観まちづくりの関係者、浅野研究室メンバーと家族に心から感謝をして、筆をおかさせて頂く。ありがとうございました。

図2　ネットワークづくり：みえ歴史的町並みネットワーク

浅野 聡
三重大学教授

熱海伊豆山・土石流災害で伝えたいと思った三つのこと

1 いつでもどこでも大災害は起こり得る

2021年7月3日午前中、東海、関東に梅雨前線が長い時間停滞し、雨量が多くなり、静岡県東部を中心に各地に被害をもたらしました。私が住む沼津市でも狩野川の支流の黄瀬川が氾濫し、旧国道一号線にかかる橋の一部が流されたという情報が入りました。住宅の現場で打ち合わせをしていた私は、自宅が狩野川近くにあるということもあり、早目の帰宅をしました。

帰宅してTVを付けたら、沼津市周辺の被害状況よりもセンセーショナルな、まるで津波のような土石流が熱海の伊豆山地区の住宅街を襲う映像が流れてきて、何が起きたのだろうと目を疑いました。

確かに3日間の長雨で雨量は多く、更に雨が強く降ったのですが、最近言われる一時間に100㎜と言われるような局地的な集中豪雨という感じの雨ではなかったからです。それは、単に豪雨による自然災害ではなく、不法な盛り土による人的災害であった双方の要素が加わり、熱海伊豆山地区の通りを駆け下りていくような土石流になったと言われています。

直ぐに、静岡県弁護士会を中心とする「静岡県災害対策士業連絡会」（以下、士業連絡会という）に土砂災害、浸水被害に遭われた市民への相談会の募集が始まりました。この士業連絡会は、静岡県内の12の専門職団体から構成され、災害発生時に，県が市町と士業の調整役となり，被災者支援に協力するという画期的なものです。これにより，市町が，災害時に士業連絡会による無料相談などの支援を極めて受けやすくなり，市町の負担も減り，県民の安心や生活再建にもつながることを目標としています。建築関係では、建築士会、建築士事務所協会、日本建築家協会（JIA）が所属しています。

静岡県の地理的な特徴は、東西に長いということです。災害が起こった熱海は、神奈川県との境にあり、熱海～浜松の距離は約150㎞、熱海～静岡で約75㎞であり、他方熱海～横浜も静岡と同じ約75㎞、東京は約100㎞で、浜松よりも東京の方がはるかに近いのです。

ただし、災害時の相談窓口は静岡県なのですが、東部を拠点としているJIA静岡の会員は少ないのです。第一回目の相談会を7/26～8/10まで開かれることになり、東部に住む建築家として、まずは4日間相談会に参加しました。

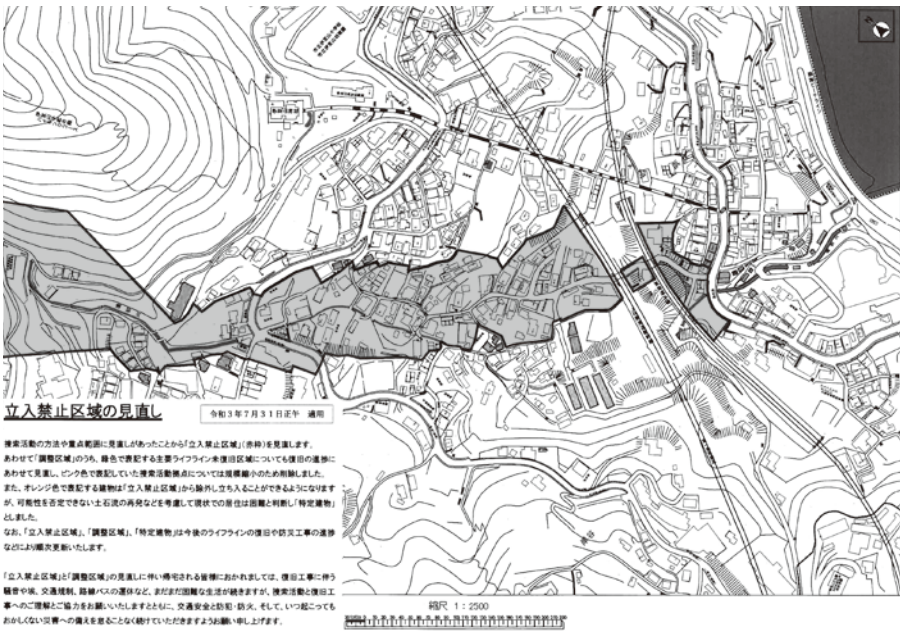
2 罹災証明には建築の専門家が関わるべきではないか

相談会に参加して、初めは気が付かなかったことですが、被災者が支援をもらうために必要な「罹災証明書」の判定は、建築の知識のない資産税課の職員が、客観的な見地から行うということです。項目が細分化されていて、被災状態の何％×何％の掛け算で積算されていくため、建築的には大きく破損していても、準半壊や、準半壊に至らないケースも多く、被災者の皆さんは途方に暮れていました。勿論、公的なお金が投与されるので、むやみやたらにお金を出したり、支援制度を活用できるように

下流の被害状況

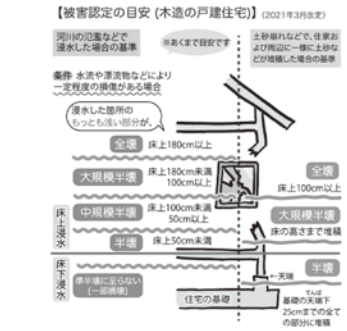
被害状況（7/5撮影）
（写真は国土地理院）

出典：国土交通省ウェブサイト　https://www.mlit.go.jp/river/sabo/



出典：熱海市ウェブサイト　https://www.city.atami.lg.jp/kurashi/bousai/sizusan/saigai/1011506.html

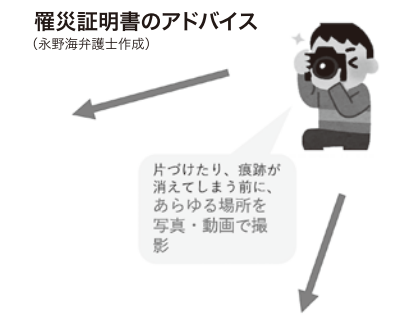
相談会の様子



「水害にあったときに」から引用

被害の程度	全壊	大規模半壊	中規模半壊	半壊	準半壊	準半壊に至らない（一部損壊）
損害割合	50%以上	40%以上50%未満	30%以上40%未満	20%以上30%未満	10%以上20%未満	10%未満

罹災証明書（内閣府防災情報ページ）
http://www.bousai.go.jp/taisaku/pdf/r203shoumei.pdf



するのは問題があるかもしれませんが、建築知識があれば、改修をするのに、どこまで解体しないと基本性能が維持できないかの判断をせずに、認定を出すのは問題がありすぎる気がしました。県や市の建築職は、個別の住宅の相談に乗っている時間はなく、根本的な街全体の建築土木の問題解決に力を注ぐ必要がありますが、せめて罹災証明書は民間の建築技術者の知識も借りながら、公平に迅速に対処した方がよいのではないかと感じました。熊本地震では、保険会社と建築士が連携して、迅速に罹災証明書の協力をしたと聞き、他県でのよい動きを学び、平時から想定して予備練習をした方がよいと思っています。

また家は被災していなくても、立ち入り禁止区域に入ったならば、自宅に帰ることもできず、また罹災証明書も発行されない長期避難世帯の認定をある一定期間まち、受けなくてはなりません。実際はもっと問題があるのは、立ち入り禁止外ではあるけれども、前面道路が無くなり、家に入れない。その他の地域でも、元々が既存不適格建築物であったのかもしれませんが、2m以上の道に接していない家が多数あることです。多分、多くの古い町にはある問題で、坂道の途中の家ということもありますが、このままでよいのかと考えてしまう家も多いです。高齢者の場合はメイン道路が使えなくなり、裏路地では狭くかつ階段が多くて生活できないので、高齢者のみ老人ホームへの入居を決めたけれども、本当は自宅で暮らしたいなど問題はまだあります。

3 これからの建築組織のあり方を真剣に考える時ではないか

この相談会で一番問題だと感じたのは、これからの建築組織の課題です。私が参加した士業連絡会には建築士会、JIA静岡が協力し、同じフロアに静岡県から委託された建築士事務所協会が建物の改修の相談会をしていました。士業連絡会は、弁護士会が中心になっているということもあり、多くの相談者が来ていましたが、事務所協会の相談会には時期がまだ早いということもあり、あまり人が来ていませんでした。現実問題としては、JIA静岡全体で会員は50名を切っています。かつ先に書いたように静岡県は東西に長いため、その地域で起きた問題はできるだけその地域で対処した方が理想的ですが、JIA静岡から協力できたのは3名で、うち1名は中部のため、1日限りでした。日々の仕事をしている中、8月以降は私一名となりました。結局は今も建築士会の東部の人たちが協力していますが、JIAとして本当にこのままでよいのかと思ってしまいます。

昨年12月に静岡県建築文化研究会の講演会がJIA静岡の担当で「これからの地域の建築家の役割」をテーマに内藤廣先生に講演してもらいました。建築家は建築作品だけを作っていればよいという時代ではなくなってきています。この相談会で、ある人から言われた話があります。「建築士会と建築士事務所協会は統合した方がよい」「JIAは仲良しクラブでよいのではないか？」私はJIAに所属している以上、仲良しクラブではなく、折角「公益社団法人」にした以上、成熟した組織でないといけないと思っています。片や、現実問題として人数の不足もあり、建築組織は本気に組織編成をし直すべきだと思っています。

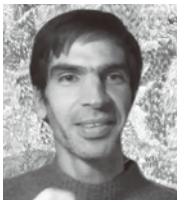
異常気象により毎年のように各地で想像の付かない事態が起こっています。SDGsが叫ばれている時代に合わせて、地方に住む建築家も体制を変えるべきではないでしょうか？士業連絡会における建築以外の他の会は、専門種一つに一つの会しかなく、会の中で軋轢はあるので、建築士の組織が分かれているという気持ちは解るけれども、ただあまりにも分かれていてまとまらないのではないかともいわれました。内藤廣先生の講演では、中央から変えるのは難しいので、地方からアクションを起こした方がよいとアドバイスされました。確かにそうかもしれません。

相談は9月中旬まで平日1〜2回、週末1回と毎週続けられ、10月以降から現在も隔週の土曜日に相談会が開かれています。私は住宅設計をしているので、土曜日に打ち合わせが多いため現在は協力できませんが、本来ならば、JIA静岡から誰かが協力をして、地域の組織に対して平時から建築家の信用を根付かせていく必要があるのではないかと思っています。

髙島 ゆかり（JIA静岡）
一級建築士事務所アトリエ結

JIA 愛知発　住宅研究会

「造園」と「建築」の関係を考える。
–「動いている庭」とジル・クレマンについて–
エマニュエル・マレス氏　田瀬 理夫氏


エマニュエル・マレス氏

田瀬 理夫氏

ジル・クレマン著
「動いている庭」

ジル・クレマン著
エマニュエル・マレス編
「庭師と旅人」

12月4日土曜日にてオンライン開催されたこの会は、JIA全国各支部、建築関係者、造園・ランドスケープデザイン関係者、学生ほか多方面へ呼びかけた結果、合計134名（JIA会員41名、一般40名、学生53名）の方に参加いただきました。映画の中でジル・クレマンのガイドを務められ、書籍「庭師と旅人」を出版されたエマニュエル・マレス氏を基調講演に迎え、また書籍「動いている庭」の帯文を書かれた造園家の田瀬理夫氏と対談、ディスカッションをして頂きました。講演会前に映画「動いている庭」を上映し、映画の冒頭にマレス氏より解説を加えて頂き、より見識を深めていきました。映画監督の澤崎賢一氏には映画鑑賞後のアフタートークにて「分野が異なる専門領域の間における関係や影響」から「世界の新しい見方」を発見し、自らの世界観を問い直すヒントとなればと説明頂きました。

■第一部 基調講演　エマニュエル・マレス氏

「動いている庭」がフランスで出版されたのが1991年でしたが、実は７年前にクレマン氏は原稿を準備していたとのこと。同時にアンドレ・シトロエン公園の造園を手掛け、実践と合わせて思想が世の中に広がり、クレマン氏は有名となりました。2015年に「動いている庭」は翻訳出版され、同年２月にクレマン氏は初来日。東京、京都で連続講演会を開催し大反響を呼びました。そして2016年、初来日での滞在10日間とクレマン氏の思想と自然の考え方、2015年夏にフランスの自邸を訪れた際の映像記録をまとめたドキュメンタリー映画「動いている庭」が公開されました。

ジル・クレマン氏の基本理念は「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」。肩書は「ランドスケープデザイナー、植物学者、昆虫学者、小説家、思想家、芸術家、庭師」ですが、本人は「庭師」を強調しています。「生きているものが相手であり、時間の中でどのように移り変わるのか」という考え、「生命」が一番大事なことと考えているからです。

映画「動いている庭」基調講演

クレマン氏には時代とともに大きく三つの思想『「動いている庭」→「惑星（地球）という庭」→「第三風景」』があります。

1986〜92「アンドレ・シトロエン公園」

「動いている庭」では、まず自由に種をまき、植物の動きに合わせながら道をつくっていき、また、その利用者の動きからも庭ができていきます。この、形が固まることなく動いていくという考えは、田瀬氏の語る、「そもそもランドスケープデザインはいつ完成時なのかよくわからない。（中略）形というより人と人、人と自然、人と社会の関係をつくってゆく仕事なのだと思う。」（※1『ひとの居場所をつくる』著：西村佳哲　より）に通ずるものがあります。

2005〜06「ケ・ブランリー美術館」「カメの庭」

建物は庭の一部である。幾何学、中心軸を排除した、カメの甲羅をイメージした庭。非西洋的な庭園、在来種だけでなく外来種を受け入れ新しい生態系をつくる、自然や文化の多様性・混交から「惑星（地球）という庭」をつくり、逆らわず地球規模の混交を認めます。

2009〜12 サン＝ナゼール潜水艦基地

「第三風景」は空き地、放棄地、普段評価されない土地を、自然多様性の保護地区と捉える考え。「第三風景」として第二次世界大戦時の記憶を残しながら、屋上に「ヤマナラシの庭」「ベンケイソウの庭」、そして「ラベルの庭」をつくり、そこで学生は植生を学び、歴史は記憶に残っていきます。

■第二部 ディスカッション
エマニュエル・マレス氏　田瀬 理夫氏

今回田瀬氏は岩手遠野から参加されましたが、放し飼いの馬中心の環境管理のなかで住まい方を問い直すことで、限界集落はむしろ豊かになり、多様性を取り戻す実践をしています。また危険外来種についての捉え方は、バランスが重要であり、固有種なもの貴重なものを守るのではなく、日常的に地域、身のまわりにあたりまえにあることが「生物多様性」と考えています。社会性、公共性については、コンクリートの解体ガラを敷地の土木資材として再利用し「持ち込んだものは持ち出さない」ことを実践し、地球温暖化や生物多様性の衰退に答えられる社会性を大事にしていきたい。と締めくくりました。

■Q＆Aにて

●土地の境界が細分化される現代において、「庭」から「環境」へ、境界線を越えるプランニングを心掛けることで「動いている庭」の思想が広がるのではないだろうか。

●西洋に比べて建築家のランドスケープに対する学習が足りない。建築を始める前に地域、植物、風景を理解し、建築の周りとの関係性を意識すべきである。

●今見える景色は戦後の「人間本位」がつくった景色であり、これからは「植物本位」「動物本位」も考えることで建築もランドスケープも変わっていく時代である。

●人にとって心がおだやかになる「庭」とは、形やスタイルではなく、「庭」に愛情を注ぐ、住まい手が育てる「庭」をつくると楽しく、生活することで本来の価値がわかる。

ジル・クレマン氏の思想、マレス氏、田瀬氏からの言葉は、どれも建築にも、また世の中すべてに通じて考えさせられる根幹であり、人間も自然の一部であることに帰り、地球に対して「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」ことが重要であり、クレマン氏の「私たちはまさに文明の岐路に立っているのであり、どうすべきかをもっと議論する必要があると私は考えます。」というのは前に進むことだけではなく、今までとは全く違った角度から物事を見渡すことが重要と感じます。

今後も植物の可能性、造園と建築を考え、さらには街、環境、地球へと考える機会となればと期待します。

西村 和哉（JIA 愛知）
エイチデザイン/アーキテクト

歴史学の視点
ー電脳設計論壇　#10 前山 和喜 氏

電脳設計論壇の第10回は、総合研究大学院大学の前山和喜氏をお招きして2021年11月26日に開催された。氏のご専門は日本計算史である。

講演では、まず序として氏のスタンスと歴史学の方法論が紹介された。コンピュータの歴史ではなく、計算実践や計算機利用の歴史であること。技術の発展段階を整理するよりも、段階間の連続性を描くことに主眼があること。線形的な歴史ではなく、複数の流れの並列・交錯の結果として事象を捉えること。計算という視点から歴史（全体の）像を捉えるのが目的であること。コンピュータやそれを利用する方法は、人間の世界についての理解や社会の在り様との双方向的な関係で発展してきたこと。

以上を前提に、本編では霞が関ビルの構造設計にまつわるコンピュータ利用の歴史が紹介された。そこでは計算機そのものの発展も、計算機を利用する為のアイデアや利用スキルの発展も、主流・傍流が時に交錯しながら徐々に醸成されていった結果として描かれていた。

「循環」と「交流」に主眼を置いた歴史学の視点に倣って、ここからはコンピュータの発展が与える建築設計への影響を、専門領域での技術発展と建築を取り巻く社会状況の変化とに分けて考えてみたい。

専門領域での技術発展として設計者がまず思い浮かべるのは、日頃から業務で扱うツールの変化だろう。Grasshopperはコンピューテーショナル・デザインを身近なものにした。BIMの導入は小規模事務所でも着実に進んでおり、大手組織事務所やゼネコンではBIMの浸透と並行してさらなる建設DXを推し進める動きが始まっている。これらの設計・建設技術の発展は建築への直接的な影響と言えるだろう。

社会状況の変化に起因する間接的な影響についてはどうか。2つのコンペ案を比較しながら考えてみたい。

かつて行われた「せんだいメディアテーク」のコンペティションは、多くの設計者にとってコンピュータと建築との関係を考える契機のひとつとなったのではないだろうか。特に2等となった古谷誠章案では、情報技術の発展を前提に「従来のすべての機能が、空間的にシャッフルされている」「人、もの、時間、空間、風景、情報が縦横無尽に錯綜する『メディアの森』」のイメージが提示された。図書等は所在や分類をICタグによって電子的に管理する前提で、利用者が好きな場所に置いて良く、この仕組みによってある種の場所性が出来上がる、というのが古谷案のコンセプトのひとつであった。先駆的で魅力的な案だったが、審査過程では、十進分類法による物理的な図書のまとまりができないのは、従来通りの使い方をしたい利用者が困る、等の指摘も出た。

「せんだい」はすでに四半世紀も前の例だが、「小千谷市図書館等複合施設・平田晃久案」は近いコンセプトをもつ直近の例と言えるだろう。この案では十進分類法による書架の配置は守った上で、人同士や知識との偶発的な出会いも起きるような仕組みが考案されている。古谷案がより現実的にアップデートされた進化形のようにも見える。

「せんだい」は伊東豊雄案に後塵を拝し実現には至らなかった訳だが、「小千谷」の方は1等となり、令和6年の供用開始に向けてプロジェクトが進んでいるようだ。平田案は先鋭的な試みながら実現可能性の高い提案として（少なくとも一旦は）社会に受け容れられたことになる。延床面積が2.2万㎡程の「せんだい」と比べると「小千谷」は4千㎡強と規模が小さく、また平屋である。恐らくそのことも平田案の実現可能性を高める要因となっているだろう。

しかし、ここでは提案内容の洗練や規模等の条件の違いといった設計サイドの状況よりも、25年という歳月で変容した社会状況の方に着目したい。

この25年でIoT技術は大きく発達し、地方都市の施設でも導入が見通せる時代になった。事業を推進する関係者間で、IoTを利用した新しい建築の実現イメージが25年前よりもずっと容易に共有できるようにもなった。

前山 和喜 氏

今読み直す「せんだい」はすんなりと理解できる内容であるが、何しろ当時はWindows95が発売する以前の世界である。審査側も高い見識を有する面々であったとは言え、まだ見ぬIoT技術を前提とした具体的なイメージを持ちにくい提案は、やや戸惑いをもって受け止められていた印象がある。もしかすると古谷自身にとっても、暗中模索の中どうにか形にしたアイデアは持て余し気味であったかも知れない。（だからこそ古谷の慧眼には改めて驚嘆の念を禁じ得ない。）

こうして新旧2つのコンペ案を並べ、各々の時代背景を「建築を取り巻く社会状況の変化」という観点で眺めてみると、そこには隔世の感がある。コンピュータ及びその利用方法の発展に伴って、情報を扱う技術や方法論は飛躍的に進歩しており、それらを扱う人間側の感覚も無意識のうちに変容を続けている。建築領域の外で起きているこうした社会の変化は、建築にも何らかの変化を要請し、そして許容するだろう。そこに建築の新しい可能性を見るのであれば、建築への間接的な影響はもっと意識的に議論されても良いのかも知れない。歴史学の視点を得て、改めてそう感じた。

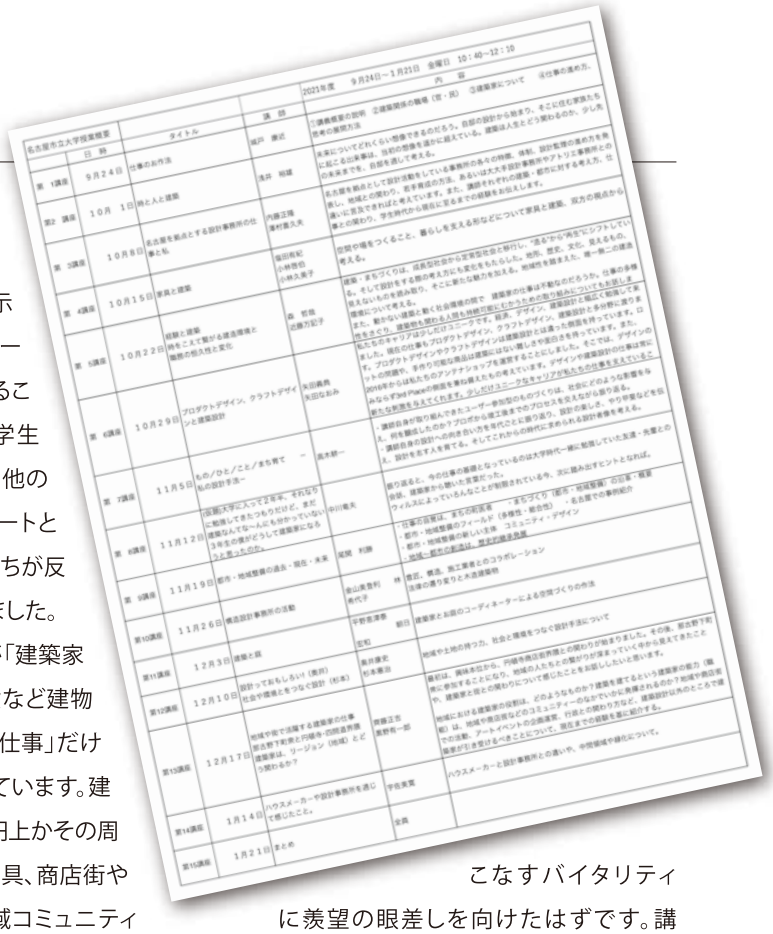
参考資料

■せんだいメディアテーク・古谷誠章案
・東京大学総合研究博物館 バーチャルアーキテクチャー展 アーカイブ
http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/Publish_db/1997VA/japanese/illusive/28.html
・せんだいメディアテーク アーカイブ 古谷案対伊東案
https://www.smt.jp/archive/data/mediatheque/competition/decision5.html
・東西アスファルト 私の建築手法
https://www.tozai-as.or.jp/mytech/04/04_furuya04.html

■小千谷市図書館等複合施設・平田晃久案
・GA JAPAN173
・旧小千谷総合病院跡地整備事業
https://www.city.ojiya.niigata.jp/soshiki/kensetsu/atochi-1-1.html

山上 健
山上建築設計

なりたい私とやりたい仕事



JIA愛知地域会のメンバーが１週間ごとに入れ替わりで登壇する大学授業「建築家の仕事」が今年度も無事終了しました。昨年の9月24日から今年の1月21日まで、毎週金曜日２限目に開催いただきました。コロナ禍の影響で初回から10月4日の第３講座まではZOOMによるオンライン授業でしたが、その後第５波が落ち着いたため1月14日の第14講座までは対面での授業となりました。しかし、最終講義はコロナ第６波の高波が押し寄せ、急遽オンラインとせざるを得ませんでした。

講師は延べ23名が登壇、内容の濃い授業が展開されました。受講生は名古屋市立大学の３年生48名です。39名が建築系、9名がプロダクト系の学生です。愛知学長懇談会という愛知県内の大学コンソーシアムの仕組みで、単位互換科目としてどの大学の学生さんにも門戸が開かれているのですが、今年度は他大学の学生の受講はありませんでした。

さて、「建築家の仕事」で講義をするJIAメンバーは、言うまでもなく個性的であり話題も多様です。多様な実務におけるデザインの考え方や技術的な手法の話題も楽しみですが、とりわけ学生たちが興味を示すのは、なぜ今の仕事に携わっているかという経緯が示されることと、仕事に楽しみながら取り組む姿勢です。そこには、学生たちへの建築家としての優しい眼差しを感じることができます。

一方で、学生たちも講師以上に個性的であり、受け取り方もそれぞれです。建築家の話に耳を傾けたくなるのは、将来自分が建築分野で活躍できる能力があるのか、この分野の仕事に就くとしたらどの建築家に近いのかといった不安と期待です。それは目の前で話す建築家への興味と憧れにつながっています。

最終講義では、講義の感想・将来の展望・拘っていることなど自由なテーマをA3版1枚に表現するよう指示が出されました。レポート課題が絞り込まれることなく、記述内容が学生に委ねられたことで、他の授業で提出するレポートとは異なり、素直な気持ちが反映されたものになりました。

まず、多くの学生が「建築家とは住宅や公共施設など建物の設計図を作成する仕事」だけではないことに触れています。建築を中心とする同心円上かその周辺の、プロダクトや家具、商店街や街づくりといった地域コミュニティなど様々な設計対象に建築家が関与していることを知ります。これまでの建築家についての先入観や既成概念から解放され、新しい価値を創造したり、人と人をつなげる役割を担う視野を得る機会となっています。選択肢が広がることは、建築家の仕事に生きがいを持って取り組む姿勢とともに、学生たちに大きな希望となったのは間違いありません。

また、講師の何人かは転職をしながら新たなキャリアに挑戦してきた経験を語りました。それらは、自らの興味と適正への整合やライフサイクルの中での選択としてキャリアアップする前向きな経験であって、転職に付きまといがちなマイナスのイメージを払拭するものでした。

ある女子学生は、男性が大勢を占めている設計建設業界で活躍する女性建築家に大いに触発されました。自らキャリアアップしながら、構造設計分野で仕事をする女性に驚くとともに、活躍の場の選択肢を自らが狭めている可能性を考え始めることができました。彼女に限らず、多くの学生が女性講師の話に後押しされました。最先端の技術でプロジェクトの先頭に立って活躍する姿と、母親としての役目をこなすバイタリティに羨望の眼差しを向けたはずです。講師からも、建築界こそ女性に活躍の門戸を広げるべきであるにもかかわらず、まだまだ男性が占有している違和感が示されました。

ものづくりが好き、絵が得意といった小さな動機から大学に入学したものの、専門教育を受ける中で、自分の能力が及ばないのではないかと言う不安を抱いているのも事実です。「建築家にはなりたくない」と宣言した学生もいました。なりたい私とやりたい仕事を模索する３年生です。建築家という仕事の技術の難しさや責任の重大さに、冷静に気がついたのだと思います。

建築のみならず、社会との関係で成り立つ仕事であるからこその専門性であり、その基盤には「仕事を楽しむ」ことのできるJIA講師陣だからこその「建築家の仕事」の姿があります。

経験に基づく話と、仕事の選択肢の広さを知ることができること、期せずしてにじみ出てしまう価値観・職業観そして人生観こそが、この授業の大きな意義であると感じます。

鈴木 賢一（JIA 愛知）
名古屋市立大学大学院 教授

キャリア教育支援の目的を達成

2016年度から始まったJIA大学授業は今年で６回目となり、これまでに30数名の講師が登壇しました。JIA会員以外に7名の建築家やデザイナーの方にも加わっていただき、多様な職域において建築家が活動していることを知ってもらいました。聴講した学生は主に3年生、6年間で延べ300名ほどになり、その半数近い人は既に社会人となっています。この講義を受けた学生のその後の職業観・勤労観に、影響を与えることができたでしょうか。

JIAの活動の一つに次世代育成活動が挙げられます。JIA愛知では建築家志望の学生へのキャリア教育支援や、子どもたちの建築文化に対する学習支援などを積極的に行っています。JIA大学授業は、将来建築家あるいは建築に関連する仕事に就こうとする学生が、建築家の職能、倫理、設計手法などについて深く理解し、将来の職業像を描くことを目標としています。

我が国において「キャリア教育」という言葉が登場し、その必要性が提唱され20年以上経ちます。一方、職業の実際を把握する機会はまだ少なく、自己の在り方を職業生活や社会生活とのトータルな関係で考えることができないまま、将来への希望や自信、働くことへの意欲が持てないでいる若者が見られることも指摘されています。

最終講義における学生のレポートの多くで①将来の仕事を考えるきっかけになった、②建築家の職域の広さ、選択肢の幅を知った、③デザインの手法やアプローチの仕方を学んだなどの感想が述べられています。さらに女性の建築家、構造家、家具デザイナー、プロダクトデザイナーなどの講義が印象に残ったとする声も多く、その活躍に刺激を受け、自身の将来像を描いた学生も少なくありません。

また昨年度、授業についてのアンケートでも、授業の内容について知的興味・関心が持てた、社会的視野の達成、この講義を受けてよかったなど高い評価を得ています。

このことからも、JIA大学授業の目的はおおむね達成できたと思われます。学生たちは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことを学んでくれたのではないでしょうか。今後も次世代育成活動を継続していけたらと思っています。

澤村 喜久夫（JIA 愛知）
JIA 愛知地域会長

名古屋市立大学「建築家の仕事」に参加して

昨年に続き担当した講座（第５講座10/22）は、前半に私が、後半に近藤さんに登壇していただき行いました。感染者が減少していたこともあり、幸いにも対面で行うことができました。その場の空気を感じながら話すのは、昨年のリモート講座とは明らかに違います。学生の表情や視線、細かな反応など、圧倒的に情報量の差があります。間合いの取り方、問いかけなどライブならではの心地良い緊張感がありました。講座の内容は昨年とほぼ同じです。私からは、「経験と建築」として、原風景、建築教育、実務、旅などから得たもの、多くの人との出会い、学び、そして数々の感動体験から建築・都市への考え方が形成され、今に繋がっていることをお話しました。近藤さんからは、企業の研究所からキャリアをスタートし、住宅関連会社を経てアトリエ開設に至ったことなどをお話いただき、その衝撃的な転身ぶりは“今は人生の通過点であり、いつでも変わることができる”と学生たちを勇気づけるものでした。

最終の第15講座は、感染者が急増してしまい、残念ながらオンライン講座となりました。最終講座は受講した40数名の学生と講師全員の参加による壮大なものです。学生から一人ずつレポートを発表してもらいました。14講座までの内容を分類して自身と関連付けるもの、これまで取組んできた課題と講座の関係についてまとめたもの、自己分析を試みるもの、建築とは違う道に進むと意思表明をするものなど様々です。学生からは“自身の想像を超える仕事の広がりを知ることができた”という感想が多くありました。また、さらにその根底にある“社会との関わり方” “人としての生き方”まで感じ取っているようで嬉しく思いました。

学生にとって3年の後期に多彩な顔ぶれの講師23名による連続講座を受けるのは、生きた社会を知る貴重な体験だったと思います。またJIA会員にとっても自身を振り返り、立ち位置を確認する良い機会になったと思います。この講座やレポートを通じて膨大な言葉のやり取りが行われました。双方にとって気づきが生まれ、思考の発露となったに違いありません。これからもこの講座が継続され、また新たな会員が参加されることを願いたいと思います。

森 哲哉（JIA 愛知）
JIA 東海支部幹事長

岐阜版「ペチャクチャ」―初めての開催を振り返って

11月27日(土)岐阜駅東ハートフルスクエアG大研修室でJIA岐阜地域会主催“ぎふ「20×20」コミュニケーション”が開催され48名が参加した。建築家クライン&ダイサムが考案したスライド1枚につき20秒×20枚=400秒で自分を表現する「ペチャクチャ」のフォーマットに倣って、岐阜周辺のプレゼンター8名―岐阜高専建築学科の今田太一郎先生と学生の後藤建太、岡本大輝さん。JIA愛知地域会の矢田義典、高木耕一さん。JIA岐阜地域会の内田実成、山田尚紀、齋藤俊輔さん―が発表しその後質問に応じた。

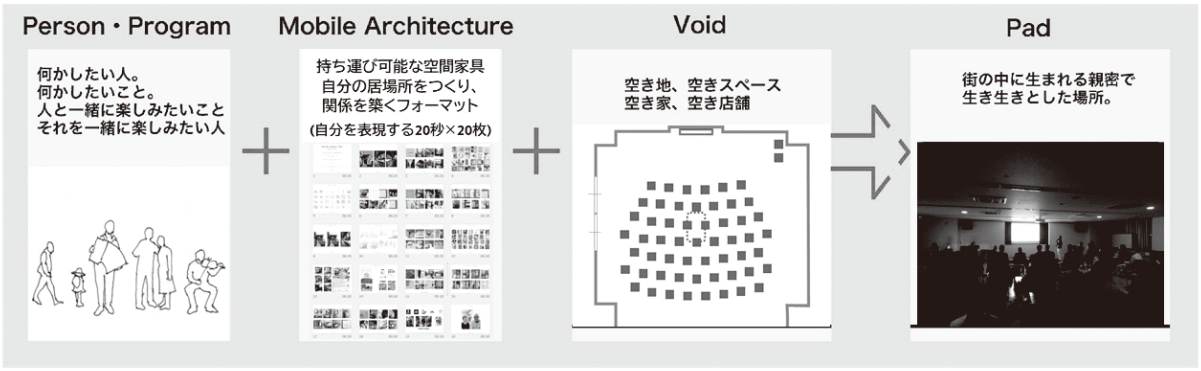
発表テーマは自由、ただし半分は仕事や勉学に関連する内容をお願いしたところ、日頃の設計や施工、研究活動の報告と合わせて趣味の盆栽、釣り、音楽、鳥、海外旅行等への愛が熱く語られ質疑応答も活発だった。400秒は慣れない人でも話を絞って伝えやすく、聞く側も集中しやすい長さ、というのは本当だった。

ワークショップやユーザー参加型の設計活動を発表する人が予想以上に多かった。建築家の職能として「自分たちで地域の埋もれた価値や課題を調べ解決策を提案したり、運営に関わったりする社会活動家」のような役割が求められていることを痛感した。今田先生の提案Pad Factory Projectはそのことをとてもよく表わしている。“ぎふ「20×20」”もまさにPadではないかと思う。

長田 芳幸（JIA岐阜）
長田芳幸建築設計事務所

Pad Factory Project とは?

Pad Factory Project（今田太一郎氏のスライドより）※下記の図は原本に“ぎふ「20×20」”の場合を当てはめたものです。
パッドは、場所、モノ、コト、ヒトで構成される何かをする場所のことです。
パッドが公共施設と違うのは、とても親密な場所というニュアンスを含んでいる点です。
例えば、車庫を改造したお父さんのこだわりが表れた場所は、パッドという感じがします。
料理好きなお母さんがこだわった調味料や料理道具で囲まれたキッチンは、お母さんのパッドです。
パッドは、町に暮らすヒトの個性を引き出し、活かしながら、様々な場所を利用して、一つずつ作り出していくための装置です。



プレゼンター体験記

この度は貴重な発表の機会を頂けたこと、とても良い経験になりました。当日は沢山の人が来ていて非常に緊張しましたが、思い出してみれば参加してよかったと強く実感しています。

JIAの賛助会からプレゼンターを出すことは片耳には聞いていましたが、まさか当日私が発表することになるとは考えていませんでした。発表してほしいとお願いされた時には断りたい気持ちもありましたが、若手社員にて発表したほうが企画の趣旨に合うのではという意見や、くだけた雰囲気で活発な会にしたいということで私が発表することになりました。

一番苦労したのはスライド作成のネタ探しです。半分は仕事、半分は趣味の話というテーマで1枚20秒のスライドを20枚作成することが条件でした。スライドの作成は簡単そうだと思っていましたが、実際に作成を進めると、自分が人に胸を張って説明できるような趣味や仕事の話があるかといえばそうでもなく、ちゃんと他の人が興味を持てる話が出来るのか、当日登壇するプレゼンターの方々と比べると面白い・興味が湧くようなテーマの発表が出来るわけないのが目に見えていたので、作成時はすごく不安になり当日の発表が心配だったことを覚えています。

発表した内容は非常に薄い内容だったと感じますが、それでも発表後に「こんな趣味があるんだね」「大学で研究していたこと、仕事のこと聞かせて」など、話しかけて頂けたこともあって、自分ではつまらないと思っていたことも、しっかり関心を持って聞いていただけたことがとてもうれしかったです。

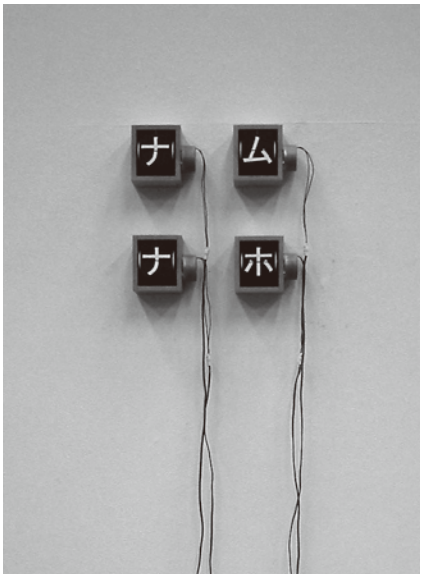
誰でも気軽に発表することが出来て、様々な人のいろんな意見や人間性を短時間で知ることが出来るのがこの企画の良い点だと思ったので、継続してこのような企画があると非常に良いと感じました。機会があればよりパワーアップした自分でまた発表出来たらうれしいです。

齋藤 俊輔（JIA岐阜）
三晃金属工業株式会社 岐阜営業所

自作自演

私の仕事 06

ムホナナ／ナムナホ



写真の作品は、昨年HPをリニューアルした際、ふと思い出して古いフォルダから探し出したもので、2006年のグループ展での発表だから、もう15年余も前になる。

機構的には、センサーに反応して文字がパタパタと変わっていくというだけで、昔あったデジタル時計の応用みたいなもの。目の前に四文字が並ぶと、それを見て私たちは恰も本能的に意味を汲み取ろうとする。あるいはそこに期待さえ抱く。ところが文字盤とは無関係な場所にあるセンサーが反応すると、眼前の言葉はすぐに消え去り、また新たな言葉を生成しはじめる。

この表象と意味の関係をタブローに見立てるなら、不遜にもマルセル・デュシャンに倣っていえば、それは文字による「遅延」である。文字とモーターとセンサーによる遅延。デュシャンはまた「観るものが芸術を作る」とも述べている。「遅延」とはつまりその構造の表れである。

ちゃんとした記録を撮っておけばよかったと後悔しているけれど、ほんのわずか自分で撮影した動画が残っていたのがまだしも不幸中の幸い。機械部分以外はほとんど手作りで、問題点としては、どうしても微妙なズレが蓄積して不具合を起こしてしまうこと。つまりしばしば「ジャムる」というわけで、そこをなんとか精度をよくし、いわば機械のように作れないものかと折に触れ思うのだが、相談する先が皆目分からない。どなたか昔の駅の行き先表示などを作っていた工場なんかをご存じだったら是非ご紹介下さい——と最後はお願いで。

道家 洋（JIA愛知）
道家洋建築設計事務所

わたしのとっておき 19

AXチェア

オタクとまではいかないが、椅子は好きなもののひとつです。もう10年以上前になるが、衝動的に買ってしまったのがAXチェア。キタニというメーカーが研究のためにコレクションしていたものが売りに出ていたものです。ラケット構造といわれる椅子で、ノックダウン構造でもありばらばらにできる。昔の木製テニスラケットのフレームとグリップとの接続部分の構造を応用してこの椅子はデザインされているのです。

新たな技術や素材ができると新しい椅子のデザインが生まれてきました。曲木の技術でトーネットが。自転車のハンドルのパイプを曲げる技術でLC3等、戦争負傷兵の添え木として開発されたプライウッド技術でヤコブセンのセブンチェア、アアルトのパイミオをはじめとする椅子。FRPができればイームズやパントン、アアルニオなどが新しいデザインを生み出しました。

最近ではカーボンファイバーや3Dプリンターの新素材や技術で今までなかった軽量、複雑な新しいデザインが生まれています。家具の世界もデザインし尽くし感がありますが、他分野での新しい素材や技術がまた新たなデザインが生まれるその連鎖が面白いと思うのであります。無論フィン・ユールやウェグナー、飛騨の家具などの木製の椅子も好きで、座り心地でいえばこちらに分があると思うのですが、椅子を鑑賞の対象とした時の楽しみ方のひとつです。

生津 康広（JIA愛知）
生津建築設計室アーキハウス

お気に入りの歴史的環境調査 データ発掘

住吉燈台・船町港跡（すみよしとうだい・ふなまちみなとあと）

松尾芭蕉も舟で下ったと伝わる揖斐川（いびがわ）の支流水門川（すいもんがわ）は大垣城下と桑名宿を結ぶ輸送経路で、船町港は大垣藩により慶長年間に大垣城下船町に設置されて以降、明治時代にかけて物資や人の往来の中心であった。両岸に川湊の趣の残る風景地である。

船町港跡南側から観る

船町港跡西側から観る

住吉燈台はその船町港にあり、港の標識と夜間の目印として天保11年（1840年）に建てられたとされている。高さ8Mの寄棟造りで、往時は最上部の四方に油紙障子をはめ込み、中に燈火を入れた。現存する川燈台として優美な外観は高く評価されている。明治20年（1887年）に再建されている。明治16年（1883年）船町港に大垣―桑名間の蒸気船が就航したが、昭和期に入ると鉄道等の陸上輸送網の発達に伴い船輸送は衰退した。

芭蕉は「おくの細道」の旅において元禄2年（1689年）8月21日に来訪し、大垣の俳人たちと交流を交わした。大垣船町から「蛤のふたみに別れ行秋ぞ」の俳句を詠み、舟で船町港から伊勢の二見に向かう。

住吉燈台

所　在　地：岐阜県大垣市船町1丁目29
アクセス：JR東海道本線大垣駅下車 南に徒歩30分
国指定名勝：おくのほそ道の風景地大垣川湊
指定年月日：2014.03.31（平成26.03.31）
所　有　者：大垣市
愛知県史跡指定：住吉燈台
指定年月日：1968.05.06（昭和43.05.06）
参考文献：現地表示版・大垣市ホームページ

鈴木 祥司（JIA 愛知）
アトリエ祥建築設計

編集後記

●今月号で連載最終回となった三重大学教授の浅野聡先生の「マクロとミクロの視点から組み立てた景観計画群のマネージメントの実践」は計6回にわたり連載され、毎回とても興味深い内容となっています。改めて第1回から読み返してみましたが、膨大な調査と研究を基に、三重県のほぼ全域をカバーした景観まちづくりを長期的に実践していく過程には驚かされます。そして、三重県の歴史的な部分を含めて私自身、学ぶことが多くありました。現在進行している鳥羽志摩地域の海部集落のプロジェクトも今後の動向が気になるところです。「熱海伊豆山・土石流災害で伝えたいと思った三つのこと」は、罹災証明書に関する判定や認定など、災害時において被災者が直面する問題を指摘しています。災害などに対して、建築に携わる者としての関わり方、そして建築組織としての今後の在り方をとても考えさせられました。　（羽柴 順弘）

●1月号（400号）より本誌の編集デザインをさせて頂いています。本誌制作と並行して様々な広告や印刷物、動画制作に携わっているのですが、その中でも企業案内や施設・店舗案内の場合『建築物への依存度』が非常に大きい事に気付きました。対象の社屋や施設をロケハンで訪れた時、その建築物が『ワクワクする』物だった時は、ひと安心！あれこれ余計な演出を考えなくとも、建物の外観や内観カットだけで絵柄が成立するので非常に助かっています。そんな、ワクワクする建築設計に携わる皆様の『生の声』である原稿を編集しながら拝読するのが、いつも楽しみです。また、今月号で髙島氏が提言される災害時の関わり、大学での講義や学生合同課題発表会を通じた後進の育成など、多岐にわたるJIAの活動に関しても、もっと理解を深められたら・・・と思いますので、今後とも（特に、ご執筆のご協力）よろしくお願い致します。　（菅沼 好典）

ARCHITECT
第402号
発　行　日　2022.3.1　（毎月1回発行）
定　　価　380円（税込み）
発行責任者　水野豊秋
編集責任者　川本直義
編　　集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内
ARCHITECT 編集部
岡崎市明大寺町荒井10番地
TEL（0564）21-2657　FAX 26-1792
発　行　所　（公社）日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http：//www.jia-tokai.org/

三重建築学生合同課題発表会2021

昨年12月4日（土）、三重大学レーモンドホールにて「三重建築学生合同課題発表会2021」を開催しました。県内建築関係の3校、三重大学・三重短期大学・近畿大学工業高等専門学校から選抜された学生が集まってくれました。今回計画した合同課題発表会では、学生がそれぞれの授業で行った課題を発表し、学内の評価と違う価値に触れることで建築の幅広い魅力を知り、学生同士の交流のきっかけになることを目指しました。ゲストとして大阪より建築家SPACESPACE岸上純子さんにお越し頂き、講評とショートレクチャーをお願いしました。これまで県内ではこのような企画はなく、初めての開催となりましたが、予想を超える45名の参加者が集まり、会場には熱気で満ちていました。

JIA三重では、5年前から教育支援出前授業として三重短大の設計課題でエスキースチェック、講評会に参加し、建築の魅力を学生に伝えてきました。この活動をより発展した形で1校だけではなく三重県全体の建築教育の盛り上がりのきっかけをつくりたい、そんな想いが今回の企画につながっています。コロナ禍でも必死に学んできた将来ある学生に発表の場をつくることは、地域の建築文化向上を目指すJIA三重の活動にふさわしいものだったと改めて感じました。また、会場を三重大学内にある登録有形文化財「レーモンドホール」としたことで、アントニン・レーモンド設計（昭和26年）の木造モダニズム建築を発表者は実体験できる貴重な時間となり、場所選定の重要さも感じました。

発表会後に、県内で学ぶ学生・先生方・JIA会員が作品を見ながら語り合う姿を見て、コロナ禍にもかかわらず対面で実現でき本当に良かったと思いました。ご協力いただいた関係者の皆様ありがとうございました。これをきっかけに3校の交流が深まることを願っています。

森本 雅史（JIA三重）
株式会社森本建築事務所

参加大学名

三重大学工学部総合工学科建築学コース2年生（6名）**「課題:住宅」**
三重短期大学生活科学科住居環境コース2年生（4名）**「課題:コミュニセンター」**
近畿大学工業高等専門学校総合システム工学科都市環境コース（建築系）5年生（4名）
「課題:学生寮＋地域交流施設」

私は合同課題発表会に運営委員として参加させて頂きました。発表会では、三重県内の3大学のそれぞれの強みや個性、岸上先生や実務で設計に携わっている方々の鋭い視点を直に感じることができ、大変充実した時間となりました。

3大学の学生の課題は、住宅・コミュニティーセンター・学生寮＋地域交流施設と全く用途も異なり、また、表現方法においても、手書きの図面から3DCADによるものまで様々でした。先生方からは、プロの建築家の目で、「どうすればもっと伝わるのか」「伸ばすべき点は何か」について、厳しくも愛のある講評をして頂きました。講評後には岸上先生から、ご自身の活動についての紹介がありました。先生のお話から、建築家として、自分の住む町で主体的に地域に関わりながら活動することで、賑わい創出に貢献していくことの大切さを学びました。

今回の合同発表会は、普段の講義のみでは外部でどのようなことに取り組んでいるのか知ることのできない私たち学生にとって、他大学の学生やプロの建築家の方々と交流できた刺激的な機会となりました。ほとんどの学生にとって初めてとなる大学外部での発表は、皆さんの努力と思いが詰まった素晴らしい講評会であったと思います。学生のモチベーションアップのためにも、今後もこのような合同発表会が開催されて欲しいと願います。

平西 明日香（JIA三重）
学生会員